

書き手の段落と読み手の段落

豊澤 弘 伸

1. 問題の所在

段落は、読解学習における重要な言語単位である。しかし、その性質については、いまだ解明されていない部分が多々あり、それが読解学習・指導上の問題にもなっている。(豊澤1991)

一般的に、読解学習に関わる段落は、段落分けという形で学習活動の中に取り入れられており、形式段落と意味段落という二つの概念を中心にして扱われてきた。もっとも、この二つの概念についても、「大段落と小段落」「改行段落と内容段落」「論理的段落と修辭的段落」「段落と文段」といった観点からの検討がなされており、意味段落の妥当性を問う段落学習も、必ずしも、その焦点が明確に定まっているとは言いがたい。(増淵1955, 倉沢1961, 塚原1966, 市川1978, 永野1986, 佐久間1988)

このような中で、小田迪夫(1994)は、林四郎(1959)を引きながら、次のような指摘をしている。

林四郎氏は、かつて次のようなことを述べた。段落は、主として正しい読解のために必要な表現の区切り目として意識され、問題とされてきたが、パラグラフは、文章を作っていくときの「組み上げの過程で問題になる」ものである。だから両者は同義ではない。結果として同じ表現のまとまりを段落といい、パラグラフという場合が多いが、前者は理解の立場から、後者は表現の立場から規定される言語単位と考えるべきである。(林四郎「文章の構成」『言語生活』'59〈昭34〉6月号)

パラグラフはコンポジション(作文)の用語であるから、当然このように考えるべきなのだが、われわれは、林四郎氏の指摘にもかかわらず、以後三十年あまりもの間、この二つの用語の区別をあいまいにしてきた。

このことは、パラグラフという表現の概念によって理解が進められているとも受け取れる。つまり、こうあるべきだという概念がそのまま、段落の概念になり、それによって、読解指導が進められているということになる。極端に言えば、文章の理想型をもとにして、既にある、理想的でない文章を解釈していることになるわけで、問題がないわけではない。

しかし、現実には、それほど大きな誤解のもととなるような差ではなく、段落についての理論的検討がいまもって不十分な状況では、この問題が完全に解決するまでには相当の時間がかかるものと思われる。むしろ、読解学習においては、高木まさき(1991)の指摘にあるように、これらの違いについての検討こそが学習対象になると考えられるのである。

表現の側からの区切りとしての「パラグラフ」は、実際には、書き手の段落として、形式をと

もなつてあらわれるものと考えられ、他方、理解の側からの区切りとしての「段落」は、読み手の言語的背景をもとにして、読み手の段落として設定されるといえる。いわゆる段落分けの際に見られるように、これらは、大きくは重なるものの、細部においては、微妙にずれを生じさせる。本稿では、このずれに焦点をあてて、段落の学習対象としての可能性をさぐることにする。

2. 検証

検証は、いくつかの文章に書き手の段落と読み手の段落を設定し、それらの比較を通して、そのずれについて考察を加えることとする。

比較の対象である書き手の段落は、原文の形式段落（改行段落）とした。また、読み手の段落は、一文一段落に組み直した原文を、いくつかの段落に再構成させたものとした。使用した文章は雑誌の説明文と新聞のコラムで、事前の調査で段落分けにずれが予想されたものである。また、いずれのものも英訳がなされており、パラグラフとの比較も試みた。読み手として段落分けをしたのは、筆者の勤務する短期大学の学生112人である。

【検証1】

使用した文章は、『日本語ジャーナル』（1990/11）に掲載された久保田淳氏の「秋の七草と日本人」で、文章の前半と後半それぞれに一ヶ所ずつ領域を限定して段落分けをさせた。そのうち、後半の“日本人は秋の草をどう見たか”についての考察を行いたい。

まず、対象となった文章（一部）をあげるが、便宜上、各文の文頭に番号を付けた。

- ①憶良の歌の順に挙げると、「秋の七草」の第1はハギである。
- ②漢字で書けば「萩」。
- ③「艸」（草かんむり）に「秋」で、いかにも秋の草の代表にふさわしい。
- ④けれども、漢字の故郷である中国では、「萩」はハギを意味しない。
- ⑤それは、カワラヨモギという、全く別の草をさす。
- ⑥同じ漢字文化圏でも植物の名などにはしばしばこのような違いがあるので、注意を要する。
- ⑦さて、日本の秋は、ハギが紅紫色の花をつけるころ、鹿の鳴き声がよく聞かれるようになる。
- ⑧もとより雄鹿が雌鹿を求めて鳴くのだが、古人はハギのあでやかな姿から、これを鹿の妻に見立てて、鹿鳴草などとも呼んだ。
- ⑨第2番目はススキである。
- ⑩昔は尾花といった。
- ⑪ススキの花の穂が獣の尾に似ているのでそう呼ばれたのだが、和歌などでは、風に吹かれて揺れているススキの穂を、“おいでおいで”と招き寄せる人のそでにたとえることが多い。
- ⑫その場合は、説明するまでもなく、招く人は女性、招かれる人は男性であろう。
- ⑬もっとも、このような見立ては、そでたもとの長い着物を着ている女性でないと、まるでイ

メージがわからない。

⑭第3番目はクズである。

⑮植物分類学上はハギと同じマメ科植物だが、たおやかな姿のハギとはうって変わって、たくましくつるを伸ばす。

⑯それでともすれば嫌われがちだが、じつはなかなか役に立つ植物なのである。

⑰それはともあれ、このクズの花は憶良以後、近代になるまで久しく詩歌に歌われなかった。

⑱むしろ、3枚から成るその大きな複葉が歌われた。

⑲この葉の裏には白っぽい毛が密生していて、風に翻ると葉裏が白く光って目立つからである。

⑳裏が見えることから、「裏見」と音の通ずる「恨み」という言葉を連想して、つれない恋人への恨みごとを述べる恋の歌などで用いられた。

(以下略)

書き手の設けた段落は、①、⑨、⑭をそれぞれ形式段落の冒頭文とするもの、すなわち、①②③④⑤⑥⑦⑧-⑨⑩⑪⑫⑬-⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳である。これに対して、学生の段落分けは、ほぼ全員が書き手と同様の①・⑨・⑭を改行段落の冒頭とするのに加え、⑦を冒頭文とする段落を設けている。さらに、④と⑰をそれぞれ冒頭文とする段落を設けているものが見られた。以下のとおりである。

書き手の段落 ①②③④⑤⑥⑦⑧-⑨⑩⑪⑫⑬-⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳

読み手の段落 a (54/112) ①②③④⑤⑥-⑦⑧-⑨⑩⑪⑫⑬-⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳

読み手の段落 b (28/112) ①②③④⑤⑥-⑦⑧-⑨⑩⑪⑫⑬-⑭⑮⑯-⑰⑱⑲⑳

読み手の段落 c (13/112) ①②③-④⑤⑥-⑦⑧-⑨⑩⑪⑫⑬-⑭⑮⑯-⑰⑱⑲⑳

読み手の段落 d (11/112) ①②③-④⑤⑥-⑦⑧-⑨⑩⑪⑫⑬-⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳

英訳文のパラグラフ^(注) ①②③-④⑤⑥-⑦⑧-⑨⑩⑪⑫⑬-⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳

これらのずれは、どのように考えられるのであろうか。

まず、書き手の段落から検討してみよう。これは、「秋の七草」を花の種類別に段落を形成していったものと見ることができる。ここでは省略したが、文章はその後、「『秋の七草』の第4番目はナデシコ、より正確には、カワラナデシコである。」「そして、第5番目はオミナエシ。」「第6番目はフジバカマである。」「さて、『秋の七草』の最後は、憶良の歌では『朝顔の花』とあるが、これは今のアサガオではなく、キキョウをさすと考えられている。」を冒頭文とする四つの段落が続き、最後にまとめられている。

これに対して、読み手ならびに英訳文の段落は、大枠としては、書き手の段落に対応しているものの、そのうちのいくつかがさらに分割されているというものである。なぜ、このようにずれが生じたのであろうか。

そこでまず、④⑤⑥に注目して論を進めよう。

この文章は全体を通して、秋の七草について、和歌の題材という観点から説明を加えている。そのうち、①②③④⑤⑥⑦⑧は、ハギについて述べている部分である。他の段落と同様、日本人

の七草に対する見立てを中心に論が展開している。

これに対して、④⑤⑥は、「萩」という漢字についての論及であり、しかも、それは、③に派生してでてくる展開である。このように考えると、この④⑤⑥は明らかに、挿入されている部分とすることができ、それらを一つの段落の中にもめるか否かが段落分けに反映されてくるということになる。

読み手の段落cや英訳文の段落では、④⑤⑥の異質性からこれらを別の段落にしている。その結果、⑦⑧においても④⑤⑥との異質性から段落を分けたものと見られる。

一方、読み手の段落a・bは、③とのつながりから④⑤⑥を一緒に段落にし、④⑤⑥と直接の関連を持たない⑦⑧を別の段落にしたものと見られる。

原文では、段落の中心的な部分である①②③とそれに密接に関わっている⑦⑧とが、その間に④⑤⑥が挿入されたことで、その関係を断って、別の段落になったものと考えられるのである。

次に、もう一ヶ所の大きなずれである⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳について見てみる。ここも同様に考えることができよう。

ここでも、⑮⑯は、歌という観点からのものではなく、挿入された部分と考えられる。そこで、ここでの段落設定は、これらを含む大段落か、独立した段落かということになるのだが、段落の冒頭文⑭に直接挿入部分が続いているため、挿入部分単独での段落とはならず、冒頭文に接続させたものと考えられる。そして、⑮⑯と⑰以降の関係は希薄であるため、読み手の段落の⑦⑧の処理と同様、これ以降は、別の段落を構成したものと見られる。

以上、わずかに二ヶ所からの分析であるが、段落分けのずれの要因として、挿入部分の処理の仕方が浮かび上がってくる。

書き手にとっての挿入とは、文章全体を見通しての修辞であり、それが段落構成に影響を及ぼしているとは考えにくい。まして、今回の場合は、段落内部のいわば閉じた部分への挿入であり、それが段落を越えて他に影響を及ぼしたり、段落を分割させたりということは、書き手の意識のなかにはないものと考えられる。

一方、読み手にとっては、全体の構想が必ずしも明確なわけではなく、前後の段落関係から構成を判断していくもので、内容ごとの比較的小さめな段落が、平板に並べられていくわけで、挿入などの効果を見きわめての段落分けは難しいものと思われる。

【検証2】

使用した文章は、朝日新聞(1991.8.26)の「天声人語」である。原文では改行はなく、かわりに▼印が記されているが、それを一文一段落に改め、各文の文頭に番号を付けたものである。

まず、対象となった文章の一部をあげる。なお、タイトルは、朝日新聞論説委員室編の『天声人語』につけられたものを使用した。

「銅像受難の時代」

- ①スターリンの像も各地で、また「血まみれフェリックス」と呼ばれた秘密警察の生みの親ジェルジンスキーの像も倒された。
- ②ソ連国家保安委員会（KGB）本部の前に建っていたジェルジンスキー像には、こういう冗談があったそうだ。
- ③昼間、像はクレムリンの方を向いて目を光らせている。
- ④人目のない夜になると、くるりと後ろを向く。
- ⑤背後からKGBに撃たれぬように……
- ⑥絶大な権力、粛清、弾圧。
- ⑦共産党支配下の暗い歴史を体現していたような像だ。
- ⑧倒れた、その頭を、市民たちが踏んでいた。

「天声人語」については、朝日イブニングニュース紙‘VOX POPULI, VOX DEI’に英訳文が掲載されているので、あわせて比較をした。その結果が次のとおりである。

- 書き手の段落 ①②-③④⑤⑥⑦⑧
- 読み手の段落 a (51/112) ①-②③④⑤-⑥⑦-⑧
- 読み手の段落 b (42/112) ①-②③④⑤-⑥⑦⑧
- 読み手の段落 c (12/112) ①②-③④⑤-⑥⑦⑧
- 英訳文のパラグラフ ①-②③④⑤-⑥⑦⑧

この比較で、とりわけ注目させられるのは②③④⑤の部分の一つの段落として独立させるかどうかということである。書き手以外は、読み手・英訳文ともに一つの段落としてまとめている。（読み手cが②を前段に取り込んでいるが、③④⑤を独立させているので同様に考えておく。）

内容から分かるように、②③④⑤はジェルジンスキー像についての逸話である。ロシア人の得意とするジョークが挿入されている部分と見ることができる。これは、「秋の七草と日本人」の場合と同様、読み手や英訳文において、挿入される部分が、それ以外の部分とは段落の上でも分けられることを意味する。話の筋からは、⑥以降が①に直接結び付くことが明らかなのだが、間に挿入があるために分けられたものと考えられる。

読み手は、文章内部のまとまりをその前後関係に着目しながら並べ、段落を形成しているのである。このことは、読み手が段落構成を考える場合、必ずしも文章全体に関わる論理展開にしたがったものにはなりえないということになる。

「秋の七草と日本人」の場合、原文（書き手の段落）では、このような挿入部分が、前後の部分に含まれる形で大きな段落が形成されていた。

ところが、ここでは、挿入部分が二分され、段落が形成されている。この理由としてはいろいろ考えられると思うが、新聞コラムというスペースの限定と読み手（の読み方）を意識した文章構成といったような、いわゆる修辞的効果に関わる要因が大きいといえる。

とくに、この場合、挿入されているのがジョークであり、それが旧体制下での政治批判の手段の一つであったということを考えあわせると、単なる挿入ではないということがいえるのである。

【検証3】

使用した文章は、朝日新聞(1991.9.2)の「天声人語」である。検証2と同様に、書き改めてあるが、ここでは、一部を使って段落分けを行った。

まず、対象となった文章をあげる。

「風の祭り」

- ①風という字は凡に虫と書く。
- ②凡から察すると、風はボンあるいはハンと発音され、vやwで始まるフランス語や英語の「風」と同じように、空気の振動を表した擬声語だろうという。
- ③ロンドンで、風をどう表現するかという、各国の俳優の競演を見たことがある。
- ④欧州の人々は、フーッと息を吹きながら体を揺らし、くねらせる。
- ⑤日本人が一人いて、似た動作をしながら、シューッと音を発しているのが印象的だった。
- ⑥日本書紀が記す風神は、シナツヒコノミコトとシナトベノミコトに男女二神。
- ⑦その名前やアラシ(嵐)、ニシ(西風)などから察すると風の古語は「シ」だ。
- ⑧かくして「シューッ」。

書き手の段落 ①②③-④⑤⑥⑦⑧

読み手の段落 a (81/112) ①②-③④⑤-⑥⑦⑧

読み手の段落 b (17/112) ①②-③④⑤-⑥⑦-⑧

読み手の段落 c (11/112) ①②③-④⑤-⑥⑦⑧

英訳文のパラグラフ ①②-③④⑤-⑥⑦⑧

ここでは、読み手の段落は、若干の差こそあれ、大体一致している。また、英訳文に完全に一致したものが7割もあった。

注目されるのは、③と④の処理である。原文では、③までを前段に入れ、④で改行しているのに対して、読み手の大半と英訳文では③で改行している。

これは、図式的には、前の「銅像受難の時代」と類似しており、内容のまとまりによって三つに分けられているといえる。〈「風」は擬声語〉→〈各国の俳優による「風」の競演〉→〈日本の「風」は「シ」・「シュー」〉という筋で、なぜ、日本人の俳優による「風」の表現が「シュー」なのかを解き明かす論理展開となる。

これに対して、原文の書き手の段落にしたがえば、〈「風」は擬声語〉→〈欧州では「フーッ」、日本では「シューッ」〉という筋となり、日本人の「風」に対する感覚の特異性が強調される論理が展開することになる。

実は、この文章は、ここにあげた部分の前に、風の盆についての話がつく。「風の祭り」全体として、風と日本文化の関係をテーマに論が展開していくのである。書き手の段落は、このテーマにそくして設定されていると考えられる。

これに対して、読み手は、与えられた部分からだけでは、書き手のテーマを把握することがで

きず、文章の筋から論理を展開させ、段落を設定しているといえる。

これは、高木（1991）によって指摘されている着目点の違いによる「脈絡」の相違に通ずるものと考えられる。

3. 結論

今回の検証では、書き手の段落と読み手の段落のずれの要因として挿入の有無が指摘された。一つの形式段落として設定された段落の内部に、異質な部分が入り込むことによって、読み手は書き手の段落を分割するというのである。つまり、段落の内部に階層構造のようなものが存在する場合、読み手は、段落を分割してしまうといえるのである。

このことは、読み手の側が、形式段落をいくつかまとめて意味段落をつくるという、読解の段落学習どおりの段落設定を行っているの対し、書き手の側は、段落内部を構造的にしていくという、いわばコンポジション（作文）におけるパラグラフ作成を行っているものと見ることもできよう。

これまで、読解学習は、一般的には、形式段落をまとめること（意味段落を形成すること）で、文章全体の把握へ進んできたのであるが、段落内部の小意味段落というような、文より次元の高いまとまりにも考慮をする必要があるのではないだろうか。形式段落から意味段落へという階層の下に、もう一つの階層を設定したいと考える。

書き手の場合は、文章全体に一貫した表現の姿勢というようなものがあって、それが、各々の文の結束性を高め段落形成にも影響することが考えられるが、読み手の場合には、その意味での段落構成意識は薄いと考えられる。このような、段落意識のずれに着目することで、読みの深化がはかれるのではないだろうか。

なお、今回の検証では、読み手の段落構成が、概して、英訳文のパラグラフ構成に近いことが分かった。英語では、トピックセンテンスとパラグラフの関係が厳密であるから、その意味では、英訳文と読み手の段落が一致するともいえるが、翻訳という過程で、読み手としての訳者の意識が介在し、段落に反映されていることも考えられる。あるいは、読み手である学生の側に、パラグラフ意識が強く働いたとも考えられるが、この問題については、他稿にゆだねることとする。

[注] この部分の英訳文は次のとおりである。

Following Okura's sequence, the first of the seven flowers of autumn is *hagi* (bush clover). A fitting tribute to the flower's status as a symbol of fall, its kanji is composed of the character for autumn topped by the radical for grass.

Interestingly, in China — the *birthplace* of kanji — the character for *hagi* refers to *kawarayomogi* a plant of no relation to bush clover. The difference in meaning points to a pitfall of which all Japanese students

should be wary: the same kanji sometimes refers to different plants in different kanji — based languages.

On the day that lavender blooms appear on the stems of hagi, meadows echo loudly with the call of deer — of bucks searching for a doe. Inspired by their cry, ancients likened the bewitching beauty of hagi to female deers. Another name for hagi, in fact, is *shikanagusa* — “flower of the deer’s cry”.

The second of the seven flowers is *susuki* (eulalia). Since the stems of the plant resemble the tails of animals, the plant has also been called *obana* (“tail flower”). Composers of traditional Japanese poems likened the flower’s elegant, breeze-blown form to the sleeve of a person beckoning someone — a woman, most likely, calling a man. Ancient Japanese probably envisioned the plant as a woman wearing a long-sleeved kimono.

The third of the flowers is *kuzu* (arrowroot). Classified by botanical taxonomists as a species of the bean family — of which hagi is also a member — the plant’s brawny creepers are a contrast to the graceful, demure stems of hagi. Though despised by some, the plant has many uses. Its graces have been sung by poets from the day of Okura to the present. One main theme for poems is the plant’s three-pointed compound leaf. The dense white fibers on the underface of the leaves shine brilliantly when upturned by the wind. Our minds associate the visible undersides of the leaves with the homonymic *urami* (bear a grudge), one reason kuzu has inspired many a poet tormented by a heartless lover.

〔引用・参考文献〕

- 市川 孝 1978『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 遠藤 好英 1977「段落」『国語学研究事典』明治書院 p. 593～594
- 小田 迪夫 1994「パラグラフによる思考学習(1)」『教育科学国語教育』498号 明治図書 p. 116
- 倉沢 栄吉 1961『文章論的読解指導』明治図書『読解指導の方法』明治図書
- 佐久間まゆみ 1988「段落」『国語教育研究大辞典』明治図書 p. 186
- 高木まさき 1991「読みにおける子供の脈絡と大人の脈絡」『日本語と日本文学』15号 筑波大学国語国文学会 p. 8～10
- 塚原 鉄雄 1966「論理的段落と修辭的段落」『表現研究』4号 表現学会 p. 1～9
- 豊澤 弘伸 1991「読解指導における段落の有効性」『関東短期大学紀要』36号
- 永野 賢 1986『文章論総説』朝倉書店
- 林 四郎 1959「文章の構成」『言語生活』93号 筑摩書房 p. 32～33
- 増淵 恒吉 1955「段落」『国語学辞典』東京堂出版 p. 629